

幌延・ひとつの裁判と地方自治

滝川康治

動燃がお膳立て

初冬の旭川の空はどんよりくもり、時おり湿った雪が舞っていた。その日(九一年一月二日)の証人は、動力炉・核燃料開発事業団(動燃) 幌延連絡所の佐藤長治前所長だった。ヒゲをたくわえ、地味なスーツ姿で旭川地裁の証人席に座った前所長は、いくぶん緊張しているように見えた。

動燃が計画している核廃棄物施設(貯蔵工学センター)をめぐる、立地を推進しようとする八市町村の議員有志による協議会が、八九年一〇月に発足した。その議員団体に対して幌延町が行なった補助金の支出が地方自治法に違反する、として同町の住民一〇人が訴えているのが、この裁判である。被告席に座っている大柄の人物は、樺太引揚者であり、かつて酪農を営んだ経験をもつ上山利勝幌延町長。原告の顔ぶれもまた現職の酪農民が多く、

それぞれ車で四時間ほどをかけての出廷である。提訴からすでに二年近くが経過し、一〇回の口頭弁論が積み重ねられた。

議員たちが自発的に結成した団体ならば、財政面でも、会の運営にしても、参加した議員自らが執り行なうのが自然な姿と言えるだろう。が、法廷に呼びだされた議員団体の前会長は、結成のお膳立てをしたのは、立地計画の事業主体である動燃の職員だった、と証言していた。

山本行雄弁護士の主尋問は、議員団体が発足するにあたって、現地連絡所がどのように介在していたのかを明らかにしようとしていた。

証言は、八九年四月に着任した前所長にとって、計画の賛否をめぐる地元情勢を把握する業務が彼の仕事のうえで重要な位置を占めていたことをうかがわせるものだった。「周辺市町村の各議員の賛否を仕分けする内部文書を、部下の方から報告を受けていたのではありませんか」

と弁護士がたずねた。

「メモ程度ではないかと思えます。〇×というかんじで……」

前所長は、そう答えた。

そのあとの尋問は、前会長の証言をたどる形で進んだ。焦点になったのは、前所長らがお膳立てしたとされる、八九年七月の発足準備世話人会の経過である。

世話人会は、司会も初めのあいさつも動燃職員によって行なわれていた。弁護士が前所長の脇に歩みより、書証を示しながら言った。

「主旨文を作ったのはあなたたちですね」

「原案的なものを作成し、議員の方に見てもらい、それで私たちがワープロで作成しました」

との答えが返った。

「設立そのものにかかわっていたのではありませんか」

「それは解釈の問題だと思います」

「そのことは裁判所が判断しますので、事実を確かめて下さい」

その場のやりとりを、裁判長がいさめた。

前所長らが作成した「主旨文」には、次のように書かれている。

「我が国における産業構造は、現在先端技術産業へと大きく変革しつつあり、道北地域にこうした新しい産業を積極的に誘致し、第一次産業との調和を図っていく

ことこそが過疎化を脱却し、真に道北地域の将来を切り開くものであると信ずるものである。——略——

我々は「貯蔵工学センター」の安全性においては、日本の科学者、技術者の良識と国の安全政策を信頼するものである。

幸い「貯蔵工学センター計画」を進める国の決意が極めて固いことを確認した現在、地域としてこれを誘致する姿勢を示し、国に対して道北の存在価値を強く認識させると共に、本会が指導的役割を果たしながら「貯蔵工学センター」の計画実現の過程において、道北発展の施策に支援と助成を働きかけてゆくつもりである。——略——

我々は地域の民意を代表する立場と、その先見性、独自性をもって地域に共通する課題を一致協力して進めるべく、今回そのための初会合を開催するしだいである」

一次産業と核廃棄物施設が共存できるのか、地域の民意が賛否いずれを選択しているのかと考えてみれば、この文章はかなり牽強付会と言わなければならない。動燃自身の願望が表現されていると思っただけでみると妙に納得でき、滑稽な印象すら受ける。が、事業主体による作文と聞くと「マッチポンプ」という言葉が頭に浮かぶ。

なぜ議員団体か

酪農のマチ・幌延が、過疎脱却を旗印に原子力施設の誘致にのり出してから、もう一〇年あまりの歳月が流れた。

たしかわ・こうじ
一九五四年北海道生まれ。和学人文学部中退。地方紙記者、農業などを経て、現在、フリーター。

自治研中央推進
委員会事務局発行
「月刊 自治研」
92年3月号

公害企業や自衛隊の誘致が話題に上ったあと、町と議員の有力者たちは、原発に照準を合わせた。「泊の次は幌延に原発を」と北海道電力に陳情するが、町が予定地にあげた日本海岸の浜里地区は、地盤が軟弱で建設が無理だとわかると、以前から話のあった、全国初の核廃棄物処理センターにしては……という線に、矛先を変えていった。

当初、その処理センターでは「低レベル」を扱うとの話だった。が、八四年春に青森県下北半島への核燃料サイクル基地の立地話が報じられた直後に、「高レベル」へと変身する。過疎に悩む道北のマチの誘致話は、やっぱり視されてきた核廃棄物の置き場や、最終処分に向けた実験場を探していた動燃などにとって、「渡りに舟」だった。翌年秋に動燃が現地踏査に着手するにおよんで、道民世論が沸騰して、立地計画は道政をも巻きこんで政治問題化していった。

機動隊の力を借りながら、動燃はボーリング調査を続けたが、反対世論の前に次第に腰砕けになり、八八年春に調査結果を発表したものの、それ以上は踏み込めずにした。

八九年になると、膠着状態を打ち破ろうとする動きが次第にめだってくる。

「廃棄物の荷揚げは、ぜひ天塩港でやりたい」

科学技術庁の担当官らが、天塩町議との会合などで説明していた。

③立地促進の自民党が道議会でも再び過半数を占める
このうち、どれかひとつの条件が整えば着工に踏み切りやすい、と協力を求められたという。

「三条件発言」と前後して、周辺八市町村の工商业者や建設業者などが中心になって、民間の誘致期成会が発足している。各地の推進派住民をつなげる接着剤の役目を果たしたのが動燃職員であったことは、想像に難くない。幌延町とその周辺自治体を網羅した立地推進の議員団体をつくるにせよ、各地の情勢をつかんでいる動燃幌延連絡所がイニシアチブを取らなければ、誕生させることができなかった。

会員の胸のうち

紅葉が進み、サロベツ原野を吹きわたる風が冷たさを増してきた。北に向かう天塩川が大きく南に蛇行して、日本海に注ぐところに天塩町の市街地がひらけている。ここは、酪農と漁業のマチである。

九一年一〇月のある日、私は漁港の近くで間谷さんの家を探していた。春まで町議会議長の座にあった間谷さんは、天塩豊富、中頓別三町の推進派議員の中心的存在であることを耳にしていたので、会って話を聞こうと思ったのである。たまたま道を尋ねた人が奥さんだった。「私ら外国へ視察に行つたけれど、フランスなんかは核廃棄物施設に」国が振興資金ひとつ出しちゃいないよ。

町長選挙の感情的なしこりから割れた中頓別町議会の一方の勢力に、動燃職員が巧みに近づき、「立地推進決議」の採択を働きかけたりした。

動燃幌延連絡所の前所長が裁判所に呼ばれて証言した、議員団体設立のお膳立ての一件も、こうした流れの延長線上にある。

議員団体の会員になっている天塩町議の一人は、当時を振り返ってこう言う。

「八九年三月には三町（天塩、豊富、中頓別）の議員有志の会合があった。（立地のためには）三つ仲良くやらなければ、ということが集まって、そこで六〇％三町に絞つたんだ。そのころ、『自分で（誘致に）手をあげておきなから、今の幌延がさっぱり他町村に働きかけに歩かないじゃないか』っていう声が、周辺の推進派議員のなかにあった。そうした雰囲気を知った動燃が人数合わせをして、下準備をしたと思うんだよ。動燃は一生懸命にならざるを得ない立場だった」

なぜ三町に絞ったのか——それを解くカギは、八八年春に立地調査の結果発表があつてまもなく、陳情に行つた幌延町長に動燃や科学技術庁が示したとされる「着工の三条件」にあるようだ。

①幌延を含めた近隣八市町村の過半数が誘致に賛成の議決をする

②誘致に反対している横路知事の交代

危なくないんだからね。何で危ないのかわつて、むこうの人に不思議がられたくらいだよ」

浜の男らしい直截な語り口で、数年前、町議会で行つた欧州の核廃棄物事情視察（反対派議員は不参加）を引き合いに出しながら、安全性を力説した。

「間谷さんが（裁判になっている議員団体をつくった）仕掛け人とのことです」

ひとしきり話に耳を傾けたあとで聞いてみた。

「私は貯蔵工センターはゴミ捨て場じゃなくて宝石だ。一般の人に放射能の被害なんかありえない」と、豊富の人にも話してやつた。視察にも行ってきて幌延に言葉をかけてやつた。それがきっかけになって（議員団体が）できたんだと思うよ」

仕掛け人かどうかは別にして、大きな影響力をもっていたことは言葉のしぼしぼから伝わってきた。

間谷さんは、天塩漁協の組合長でもある。息子二人も漁業をやっているという。ホッキ貝やシジミといった根付け漁業は、計画的な採取をしているので資源量に問題はなく、組合員一人平均で年間七〇万円の水揚げがあり、利益率は六割以上とか。それに共同事業でやっているサケ漁などが加わる。

「食えるからよそに稼ぎに行つても帰ってくる者がいる。いまは半分以上が若い者になつちまつた」

そう言つて間谷さんは胸を張つた。ここは豊かな漁村

なのである。そんな恵まれた生活と豊富な漁業資源があるのに、なぜ「貯蔵工学センター」の誘致にこだわるのだろうか。それが私の感じた疑問だった。

立地推進の議員団体が発足したころ、天塩町議会では推進派のほうが多数を占めていたという。が、その後の情勢の変化のなかで、慎重姿勢になっていった人もいた。「最初は（同僚議員のなかに）『やれ、やれ』っていう人がいて、私も賛成だったから会議に出かけていった。でも、外国に視察に行ったり、勉強したりして慎重になった。科学技術庁の大臣が来るわけじゃなし、下請けの動燃にやらせているんだから知れたもんだよ。その動燃も『安全だ』っていうから突っこんでみると、何も説明できない。」

これは子々孫々に影響の出る問題だし、泊村のように地方交付税を打ち切られたりもする。（貯蔵工学センターの事業費の）八〇〇億円なんて、はした金ですよ。動燃は、田舎者だと思って、われわれを甘くみたんだよ。それに幌延や一部の議員がまんまと乗せられた。私の家にも、留守の時に新しい動燃の所長が名刺を置いていったけれど、会う気もしないよ」

改選によって副議長になった石山重夫さんは、市街地にある自宅の玄関先で、動燃に対する不信感をあらわにした。リーダー役だった間谷さんとの確執もあるようだ。商店を営むある議員は「保守系の人間なので（議員団

側はそんな結論を導き出そうとしているように映る。実際はどうだったのだろうか。

「結成の目的は、促進決議をやるために集まりが必要という面が大きかった」

「みんなて促進決議をやるべ、という話があったし、それがなかったら意味ないしよ」

これは、会の結成と決議とが密接に結びついているという見方。別のとらえ方もある。

「周辺の過半数が決議したら、国も（着工に向けて）腰をあげるだろうという面はあったが、それは大きな要素を占めていない」

「議員団体と（九〇年六月の）豊富町議会の推進決議とは関係ありません」

「あの会は、推進決議を申し合わせるようなところじゃないですよ」

いずれも会員になっていない人の話である。中心にいた人のなかには決議をあげようとする意思があったらしい。設立当時の会員数は六三人と報告されているが、これは八市町村合計の議員定数一二八人のほぼ半数に相当する。それだけの議員数がいれば、立地推進の議会決議の牽引力になる、と考えるほうが理にかなう気がする。

が、補助金支出をめぐって裁判が提起されたり、翌年には道議会での反対決議が行なわれ、豊富町議会の二議員リコール問題が起こったりするなど、のっけからつま

体には）つきあいで参加した。会費だけは払っているけれど、私は慎重派なんです」と話していた。九〇年六月の天塩町議会の特別委員会では、「立地推進決議」の動きに時期尚早論を唱えて反対したとか。議員団体の内情は、どうも一枚岩とはいかないようである。

議員団体へは、各地のリーダー的な人物が窓口になって個人参加したところが多いが、稚内や浜頓別のように議会の一党派がそっくり加入したところもあった。

「設立準備会の前に案内がきたので、対応を協議して、自民クラブとして加入することになった。会費は会派の予算から出したし、それぞれトーンは違っても、それなりに意義を認めて参画したんです。会派として色をはっきりさせるという要素もありました」

当時の稚内市議会自民クラブの幹部は、こんなふうに振り返っていたが、議員団体の支部のような活動は全くなかったという。

浜頓別では、町政クラブの幹部の判断で会派として参加したものの、内部から「議長職にあるので困る」「道漁連の反対決議との兼ね合いがある」などのクレームがつき、足並みがすっかり乱れてしまった、という。このため、会費の徴収も滞っていると。同町の議会関係者から聞いた話である。

この議員団体は、^{目的}周辺市町村議会で「立地推進決議」をあげることにあつた——裁判を傍聴していると、原告

づいた。リーダー層のなかにあつた推進決議の牽引力にという思いは、組織の共通認識とならないままに、「外圧」によって活動が後退していった、というのが実態に近そうである。

尻すばみした活動

天塩の市街地からクルマで日本海岸を北上して幌延町の浜里地区に入ると、右手に砂の採取場が広がってくる。良質な砂が採れるため、かつては泊原発の骨材にも使われたが、いまは十数社が採掘にひしめき、主に札幌圏の建設現場へ運ばれるという。たくさんの採掘跡はぼっかりと口を開けたまま、放置されている。天塩で会った海運業者が、「幌延の連中は貴重な資源を食いつぶしている。跡地に牧草の種をまくこともない。あれはひどい自然破壊だよ」と言っていたのが納得できる光景である。

稚内内の漁港からは利尻富士の美しい山容を間近に望むことができる。豊富町議会が貯蔵工学センターの「立地促進決議」を採択したことをめぐって、住民団体が起こした直接請求で解職された経験をもつ佐々木一郎さんは、稚内内漁協の組合長を務めている。もともと漁師ではないが、十数年前に漁協が七億円の借金をかかえて和議申請をした際、請われて再建を図るために組合長に就任した、という。

「リコールが成立して、負けてしまったんだから、しゃ

ないわな。僕は議長が長かったんだけど、たまに（近隣の議員から）電話がかかってきて、『何かあったらリコールかけるぞ』って言われて困るよ』とボヤかれるんだ。そんなに簡単に（解職）できる制度じゃないと思っ
ていたんだけどね。

僕が情けなく思うのは、議員を一〇期やってるし、消防団長も長い、この組合長だって無報酬で町に協力してきたのに何で、ということだよ。リコールで負けて、（その後の）町議選で勝たせてもらったんだから、いまさ
ら触ってみても仕方がないけど…。

いまのところ政府の行き方だなあ。こんなことだったら地方議員だけが犠牲になって、（国は）高見の見物だもの。これだけ原発をもっている（核廃棄物を）処理できなくちゃとんでもない話だもの。必要であれば、国がもつと面倒みてくれなくちゃ」

組合長席に座り、書類に判を押しながら、佐々木さんはボヤいた。リコールで敗北しても、動燃は何の世話もしてくれないとか。

そんな愚痴めいた話を聞きながら、私はリコール運動を起こした「町民の会」会長の高橋謙一さん（酪農業）がしていた話を思い出していた。

「私らの若いころ、佐々木さんを町長選挙に担ぎ出したこともあるし、反対派の連中と彼は仲間だったんだ」

高橋さんは、そんなふうについて苦笑していたが、

「ある出席者」といい、論議は低調だったようである。最初に六三人が名を連ねたが、いまは会費を納めていない人もおり、組織の空洞化が進んでいる様子が見える。

中頓別町議会は九一年一二月に貯蔵工字センターの立地反対決議を採択した。これで隣接六町村のうち四つまでが反対の意思を示したことになる。

採決に先立って、同町議会の特別委員会は青森県六ヶ所村や動燃、科学技術庁などを視察している。私が同町を訪れたのは、議員たちがこの視察から帰って間もないころだった。

「町議選のあと、推進派の議員たちは『慎重な審議を』とか『いま（請願の採否を）決めても中頓のためにならん』とか、以前われわれが主張していたようなことを言っているんだ。去年の七月に委員会でも東京なんかへ調査に行ったときだって、彼らは『公費の無駄遣いだ』と言ってたけれど、今回は逆なんだもの」

特別委の委員長で、反対派のまとめ役でもある石黒武さんは、町議選を境にした議員たちの変貌ぶりを引き合
いに出して苦笑していた。

議員定数は一四。前回は推進派がやや優勢で、動燃職員が巧みに近づいたりして、「推進決議を採択する寸前になるなど、激しいせめぎあいを展開した。一度だけだが私は特別委を傍聴したことがあり、古びた木造の役場

かつての仲間同士が争わなければならなかったところに、この国の原子力政策のひずみと非情さがある。

豊富の二町議に対するリコール運動は、立地推進の議員団体に加入した人々にとつて、とりわけ大きな足枷になったようである。さらに自分の選挙も近づいてきて、周辺市町村が足並みをそろえて行動する雰囲気ではなくなってきた。

「最初はワアワアやっていたけれど、後はさっぱり集ま
ってこない。うちの町の推進派も、いまは『そんな（推進決議の）ことで騒ぐべきでない』という意見が強い。動燃は国の下請けみたいなもんだね。国はゆるくないことは動燃にやらせておいて何もしない。はつきり言ったら反対派の作戦に負けたさ」

議員団体の役員として、陳情や隣接町村へのあいさつ回りなどの活動に奔走してきた、ある天塩町議が自嘲気味に語っていたので印象的だった。この人は、役員も辞任したいと漏らしていた。

当初、この議員団体には幌延町から三三〇万円の補助金（初年度事業費の約九四％）の交付が決まったものの、実際に使ったのは一三五万円ほど、翌年度からはさらに縮小している。九一年度の総会では、幌延町議会の前田武人副議長を新会長に選出したものの、出席者は少なく、具体的な活動計画になると、『最小限度のことではないの』とか『会長に任せるから…』という感じてし

庁舎二階の議場で繰り広げられる論戦と、それを真剣な表情で見つめる住民たちの姿が記憶に新しい。それが今回の選挙によって、反対八、推進六と議会構成は逆転していたのだった。

「われわれは地域振興につなげようと思って（立地を）推進しているんです。反対決議に絡んで何か（公共事業など）ができなくなるが、継続審議なら道が残る。これ（貯蔵工字センター）は、いろんな地域振興策を考えるなかでのひとつで、代わるものがあれば越したことはない。でも、それがなくなると、火は残しておきたいんですよ」

中頓別の市街地で燃料店などを経営している村山義明さんは、「地域振興策」を強調していた。七月の総会で立地推進の議員団体の副会長になったとか。貯蔵工字センターという「国家プロジェクト」の実現で、技術者や行政関係者、見学者などが訪れたりする波及効果がある、国の機関に協力することで地域に恩恵が出てくる可能性がある、というのが村山さんの持論である。

現在、同町の人口は約二九〇〇人。森永乳業の操業中止、天北線の廃止、木材業の不振などで、一〇年間で一〇〇〇人が減ったという。たとえ経済的な豊かさは保つていても、人が減ってはスポーツのチームひとつ作れなくなる、消費も減る、縫製工場を誘致したけれど働く人が足りない…。話はだんだん過疎の「嘆き節」になってきた。

「でも、この町に残った人がゆとりをもって生き、食べていけばいいんじゃないですか。都会が必ずしもいい所でもないし。中頓別高校に町外からたくさん生徒が入学したという話題もありましたよね。」

私はそんなことを話した。同じ道北の小さな町に住んでいたことがあるので、過疎の哀しさは他の都市生活者よりもわかっているつもりである。田舎暮らしを心底楽しんでる友人もいる。見通しのはっきりしない貯蔵工学センターの立地に望みを託すよりも、別の振興策に活路を見出すことのほうが、焦眉の急のように思えてくるのだった。

「過疎」で共通の土俵

議員団体の会員の何人かに会って話を聞かせてもらうと、貯蔵工学センターの立地を推進する心情は、いま各地で大規模リゾート開発などに期待をつなぐ自治体や民間人のそれと大差がない、という印象を受ける。が、いまその大規模リゾート開発の多くは破綻しているのが現実である。もっと違った、地域の特性を生かした内発的な振興策があるのではないか。そうした振興策をめぐってなら、核廃棄物施設の立地の賛否は別にしても、住民同士が討議しあえるのではないか、という気がしてくる。道北各地の立地反対の住民団体でつくる連絡協議会が、「地域振興懇談会」と銘打った取組みを最近になって始め

の整合性に言及する場面もあったりした。

私が訪れた懇談会場の幌延町公民館には二五人ほどが集まって、こんな議論が交わされていた。反対運動を続けてきた人たちのなかにも、核廃棄物施設の是非を訴えるだけではなく、立場を越えて地域の将来をみんんで考えようとする機運が少しずつ広がっているのだった。

その懇談会から少したって、立地推進の議員団体の役員をやっていた杉本勇さんのお宅を訪れた。飲食店を経営するかたわら、豊富町議を八期、議長職も歴任した長老格で、温厚な人柄から議会内の信望も厚かった、と聞いていた。病氣をして議員を辞したが、観光協会の会長などを務め、活躍している。

「国はずるいんだよね。直接、周辺町村を説得しないで動燃まかせの姿勢だった。私が前に会った斉藤(科技庁)長官なんか、幌延がどこにあるのかわからないんですから。この問題は、道路や施設を整備して外堀から埋めて、本丸をドンということでない、今度はできないですよ。」

杉本さんは、国の対応を批判しながら、立地までには時間がかるし、科技庁が熱意をもって住民に啓発することが不可欠だ、と強調した。話題は豊富の観光の将来像に移り、私は、名寄で学芸員をやっている友人が言っていた、三町(幌延、天塩、豊富)共同による「サロベツ原野センター」の設置構想のことを話した。

「開拓当時の体験を旅に織り込んだ、ドラム缶を切って

た。独自の町おこしプランを練り、実現可能なものがあれば幌延や周辺自治体の町村長と会って提案したり、道にも進言したりするのが、この懇談会の目的とか。すでに都会の若者との人的交流の方法や牛の受精卵移植施設の誘致、過疎地でのゆとりある暮らし方といったテーマが話題にのぼっている、という。

「乳製品は、大量生産から手づくり個人ブランドの方向に行くはず。〇〇さんのバター、チーズ」のような形で、作る楽しみと売る楽しみの両方が可能な酪農の道を考えてはどうか。」

羽幌からやってきた男性が、手づくり乳製品についてアイデアを語った。三年前に兵庫県から豊富に入植して、肉牛などを飼う久世さん夫婦が体験談を披露しながら言う。

「うちには若い女の子が三人実習に来ているけれど、豊富の生活を楽しんでいる。北海道には巨大開発に頼らずにやっていく可能性があると思う。具体的な生活次元で(都市住民と)結びつけば、(食べ物を通じて)つながっていける。」

豊富の酪農民からは、広域的な乳牛の飼料工場の建設構想が語られ、留萌の教員からは「ライダーハウスを訪れる都会の若者と酪農家が触れ合える場をつくれなにか」という声が出される。司会者が、道の新長期総合計画に盛り込まれた農村関連施設と、懇談会で出されたアイデアと

飯場式でホッケを焼いたり、来た人を吹雪のなかに出したりといった、素朴でうまい野趣味的な大きな施設を、天塩大橋のあたりに作つたらどうか、と呼びかけたことがあるんですよ。浜森(前稚内市長)さんとも話し合っていて、具体的に進んでいた。」

杉本さんは相好をくずして語った。かつて豊富温泉は、樺太へ行き来する人々の保養地だったとか。サハリンとの交流が拡大していくと、ソ連の労働者も保養は豊富温泉へ、というブームになる。だから「夢ももう一度」とロマンを膨らませているのだという。こういう話ならば核廃棄物施設の賛否を問わず、共通の土俵で話し合えるのではないかと。懇談会の論議を思い出しながら、私はそんなふうに感じていた。

幌延町の核廃棄物施設誘致の出発点は「過疎からの脱却」だった。ここ一〇年間ほど、さまざまなきがかり、推進と反対の攻防が繰り返されてきた。法廷で争われていく立地推進の議員団体に対する補助金支出をめぐる住民訴訟も、その攻防劇のひとつ駒ではある。誘致の旗印だった「過疎脱却」は進展しないまま、当の議員団体の行方は風前のともしびのようにも見える。

攻防劇を生んでしまったのは、この国の無定見な原子力政策のなせる技である。「心の過疎」にまで至らせないために、人々がどのように力を合わせれば地方自治を取り戻せるのか、それが今後の大きな課題だろう。